
大正牡丹灯籠

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大正牡丹灯籠

【Nコード】

N3707D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

牡丹灯籠を大正の横須賀を舞台にして書いた作品です。美貌の若者木村藤次郎と美女の恋愛ですが。

第一章

大正牡丹灯籠

こんな話がある。大正時代のことだ。

横須賀に木村藤次郎という若者がいた。大学を出たばかりの前途洋々で眉目秀麗な若者であつた。背も高くすらりとしており海軍を主な相手にする会社に勤めていた。この会社も海軍だけでなく国内や海外の様々な企業を相手にしていて業績がかなり伸びていた。藤次郎はこの会社でも将来を渴望されていた。

「行く行くはあれだな」

社長は彼についてよく語っていた。語る場所は決まっていた。いつも壁に船の絵がかけられている社長室であつた。そこで赤いチヨッキとネクタイの姿で葉巻をくゆらせて彼のことを言うのであつた。

「この会社の重役だな」

「そうですね」

社長の秘書である中西が雇い主の言葉に頷く。この初老の男も藤次郎を気に入っていたのだ。藤次郎は顔もよく仕事ができるだけでなく謙虚で温厚な人柄であつたので皆から好かれていたのだ。

「楽しみなことです」

「それでだ」

社長はにこにこ笑いながらまた言うのだった。

「彼にあればいいか」

「あれといえますと。ああ」

中西は社長の言葉ですぐに勘が働いた。すぐに納得した顔になる。「付き合っている方ですな」

「まずは妻だ」

社長は真剣な顔で述べた。今度は笑つてはいない。

「男は妻を迎えてこそだからな」

「そうですねあ」

中西もその言葉に大いに頷く。この時代は今よりもずっとそうした意識が強いのは言うまでもない。家庭を持つことは絶対のことだったのだ。これは男でも女でも同じであり生涯独身というのはおよそ人として許されぬことですらあったのだ。

「今は遊ぶ相手でもいいがな」

「はい。ですが」

「いないのか」

「何分真面目な気質ですので」

そう社長に告げる。

「いないのです。残念なことに」

「ここは海軍将校ならば誰でもおなごには苦労しない」

社長は話に不意に海軍を出してきた。やはり海軍の街だから出て来る。海軍将校といえば問答無用で女が周りに集って来たのだ。それだけの社会的地位と尊敬を集めていたのである。これもやはりこうした時代だったということだ。だが藤次郎はその彼等でやっかみを覚える程の顔でしかも街の女から注目されていたのだ。だがそれでも彼の方から女を避けているわけでもないが少なくとも近寄らなかったのだ。

「それよりももてているというのに」

「好みの問題でしょうか」

中西は言った。

「好みの相手がいないのではないかと」

「遊ぶのならそこまで考えずともいい」

社長は特に考えることもなくこの言葉を出した。

「別にな」

「ところが遊ばないので」

「真剣な相手のみ探しているのか」

「どうやら」

中西はそう答える。

「では。探す必要があるな」

「そうですね」

二人は藤次郎の結婚相手を探す話をはじめた。

「もういい歳だしな」

「結婚は早ければ早い程いいのです」

これは中西の考えであつた。社長も同じである。というよりは中西が社長に合わせたのであるが。どちらにしろ二人の考えは同じであつた。

「ですから」

「探しておくか」

「はい」

「それでだ」

社長はここまで話をしたところで話題を変えてきた。

「もうそろそろだな」

「祭りですか」

「ああ。もうすぐだな」

社長の目が細くなる。彼は祭りが好きなのだ。

「今年も賑やかにいきたいな」

「はい」

そんな話をしていた。そうして祭りの時になった。二人はその夜の藤次郎を連れて夜の横須賀を歩いていった。

夜の街に海軍の白い軍服があちこちに見える。それと共に着飾った女達が見える。

出店には子供達が群がり老いも若きも楽しい顔をしている。それを見て社長達もにこやかな顔になっていた。

「木村」

社長はそこで自分の後ろにいる藤次郎に声をかけた。

「どうだ、いい祭りだろう」

「そうですね」

藤次郎もその言葉に頷く。素直な言葉であつた。

「横須賀で一番賑やかになる時だ」

「そのようですね」

彼もここに来て暫く経っている。だからそれは知るようになっていたのだ。

「君は祭りは好きか」

「嫌いではありません」

社長にこう答えた。

「この雰囲気がいいのだな」

「子供の頃から。何もかもが好きでした」

彼は社長に対して述べる。

「出店も。そこを行き来する人達も」

「そうか。好きなのだな」

「ええ。とても」

社長は後ろから聞こえてくる藤次郎の明るい声に満足を覚えていた。連れて来た介があつたと思った。そこで目の前に若い海軍将校が美しい女と並んで歩いているのが目に入った。彼はそれを見て少し気を利かせてやろうと思った。

「なあ」

「何でしょうか」

「わし等はこれから少し行くところがある」

「では御供します」

「いやいや、それには及ばない」

秘書に目配せをしながら藤次郎に言う。

「仕事でも何でもないのだしな」

「左様ですか」

「それでだ」

そう話したうえでまた彼に告げる。

「暫くここで楽しむといい」

「祭りをですか」

「そうだ。好きにすればいい」

こう彼に言うのだった。

「出店に入るなり酒を飲みに行くなりな。どうだ？」

「それで宜しいのですか？」

藤次郎は律儀に彼に問うのだった。この律儀さもまた彼が藤次郎を好むところであつた。

「社長の御供をせずとも」

「御供なら私が」

ここで中西がにこやかに彼に述べるのであつた。

第二章

「中西さんがですか」

「それは私の仕事ですよ。お忘れなく」

「はあ」

「そういうことだ。たまには羽根を休めるといい」

社長はあえて優しい声を彼にかけるのだった。

「わかったな。それで」

「わかりました。それでは」

「うむ。ではこれでな」

「また明日会社で」

こうして二人は藤次郎を一人にしてその場から消えた。一人になった藤次郎は暫くの間出店の菓子を食べたり酒を買って飲んだりして楽しんだ。だが暫く祭りの中を歩いているうちにふと一人の女と擦れ違ったのであった。

この時の流行の桃色の振袖に紅い袴、それに西洋風の黒い靴を履いている。髪は黒く奇麗なもので後ろに長く垂らしている。小柄であり白く細い顔には切れ長の美しい目と少し大きめの赤い唇がある。藤次郎は彼女を見てすぐに振り向くのであった。

「今の人は」

振り向いたその時には女はもう先へ行っていた。負い掛けようと思ったがそれができる藤次郎ではなかった。この時は振り向いただけで終わった。

その日はずっとその女のことを考えていた。次の日もである。仕事をしながら擦れ違った女のことを考えていた。仕事が終わると社長と中西がまた声をかけてきた。

「今日もいいか」

「祭りですか」

「そうだ」

社長はにこりと笑って答える。祭りは今日もあるのだ。

「また途中から一人で。どうだ」

「祭りに」

その女のことか頭にあり。答えはもう決まっていた。

「わかりました」

「そうか。ならそれで行こう」

「はい」

こうして藤次郎はまた途中から一人でいることになった。一人になるとすぐにその場を見回した。見回す理由はもうはっきりとしていた。

「いるか!？」

あの美女を探していたのだ。いるかどうかすらわかっていないが彼はいささか冷静さを失っていた。これも彼にとっては滅多にないことであつた。

見つかるという保証なぞ全くない。彼はそのことすら頭に入れてはいなかった。だがすぐに。その彼女を目の前に見たのであつた。

昨日と同じ姿でそこにいた。見ればその手に燈籠を持っている。

古風な燈籠であるが今の彼女の袴姿と妙に合っていた。それが不思議な程幻想的であつた。

藤次郎は彼女の姿を見ただけで完全に目を奪われた。そのままの姿で茫然としていた。だがやがて。無意識のうちに彼女に声をかけていたのであつた。

「あの」

「はい」

美女の方でも彼に伝えてきた。

「何でしょうか」

「貴女のお名前を御聞きしたいのですが」

彼は自分では気付いていなかったがそれまでの彼にはない程の大胆な動きを見せていた。それで彼女に声をかけていたのである。

「宜しいでしょうか」

「私の名前ですか」

「宜しければです」

こう断るのは彼の謙虚さ故であつた。

「貴女が宜しければ」

「わかりました」

美女はそれに応えて穏やかに笑つた。その笑みは気品と色気を併せ持つ、実に不思議でありかつ美しい笑みであつた。

「それでは」

「何と仰るのですか？」

「田村麗華と申します」

美女はその笑みのまま名乗つた。

「麗華さんですか」

「はい。それが私の名前です」

彼女は言つ。

「父が。漢籍に強くてそうした名前を好んで」

「そうなのですか」

この時代にはない名前である。だから藤次郎はその名を聞いて少し不思議に思つたのだがこれで合点がいった。次は彼の番であつた。

「それですね」

「ええ」

またその美女麗華に対して言う。

「私の名前ですが」

「木村様ですね」

「えっ!？」

向こうから自分の名前を言われて思わず声をあげる。

「今何と」

「木村藤次郎様ですね。御存知です」

「そうだったのですか」

藤次郎は麗華が自分のことを知っていたのを知って目をしばたかせた。これは思いも寄らないことであつた。

「以前よりお慕いしておりました」

そのうえ彼女からこう言ってきたのであった。

「昨日も気付いていましたが。女の私から声をかけるのははばかられますので」

「左様でしたか。それにしても」

前から自分を見ているということにまだ驚きを隠せないでいたのだ。その顔のままで彼女に対して述べる。

「私のことを御存知だったとは」

「はい。それですが」

またしても彼女の方から言葉を述べてきた。

「今お時間はおありでしょうか」

「ええ」

藤次郎は彼女の言葉に頷いた。

「一人になりましたので」

「そうですか。それではですね」

麗華はそれを聞いてほっとした顔になった。そのうえでまた彼に言うのである。

「私の屋敷に。おいで下さいませんか」

「貴女のお屋敷にですか」

「そうです。無理にとは申し上げませんが」

だがこの言葉は。藤次郎にとってはあがらないものであった。

彼女はそれがわかつているのかいないのか妖しさと気品が同時にある笑みを彼に向けていた。その笑みを見るだけでもう彼はその申し出を拒むことができなくなってしまったのだった。

第三章

「如何でしょうか」

「私なぞでよければ」

そうして。こう答えた。

「お招き頂きとうございます」

「有り難うございます。それでは」

麗華は彼のその言葉を聞いて穏やかな笑みになった。そうして述べるのであった。

「どうぞ。こちらに」

「はい」

彼女の後ろについて行く。そうして夜の横須賀を暫く二人で歩いた。

横須賀には数年いたがそれでも彼の知らない道であった。彼は道を進みながらこんな道があったのかと心の中で思っていた。

そうして歩いていると。やがて洋館の前に来た。夜の中に赤い屋根と白い壁のある洋館が浮かび上がっていた。彼はそれを見たのであった。

「ここです」

麗華はその洋館を指差した。そのうえで彼ににこりと笑ってきた。
「粗末な場所ですが」

「いえ、そのような」

藤次郎の目にはとてもそうは見えなかった。かなり立派な洋館である。大きいだけでなく夜の闇の中に浮かぶその外観は見事なものであり庭も奇麗に整っている。彼はそれを見て思わず目を止めていた程であったのだ。

「このような洋館が横須賀にあったとは」

「祖父の建てたものです」

麗華はそう藤次郎に答えた。

「もう家にいるのは私と僅かな使用人だけです」

「そうですか」

その言葉を聞くと少ししんみりとなる藤次郎であった。

「失礼しました」

「いいです。本当のことです」

だが彼女はそれをよしとした。

「それよりですね」

「はい」

そうしてまた彼に声をかけてくる。

「少しですがお酒やお料理もありますので。どうぞ」

「宜しいのですか？」

「はい。私もお話する相手が欲しいと思っていましたから」

穏やかな笑みになって彼に述べた。

「ですから。御願います」

「わかりました。それでは」

彼は頷いてそれに応えた。そうして彼女に連れられてその洋館に入るのだった。洋館の中も見事な内装であり彼はそれにも目を奪われた。そうしてその日は酒と彼女自身を心ゆくまで味わい、楽しんだのであった。彼にとっては心から満足できる夜であった。

朝まで二人だった。朝出勤する時にそつと横にやって来た麗華に囁かれた。

「今夜も。来て頂きますか」

「今夜もですか」

「はい。横須賀の駅の前でお待ちしています」

国鉄の駅である。そこから一直線に大きな道路が開けている。これはこの街が海軍の街でありそれに基いて整備されてきたからである。

「ですから。御願いますね」

「わかりました」

もう彼には断ることができなくなっていた。昨夜でもう彼女から

離れられなくなっていたのだ。そうしてその夜も彼は彼女と会った。その次の夜もそのまた次の夜も。彼は麗華と二人きりの甘い夜を過ごしたのであった。

そうした日々が一月程続いた。やがて彼は少しずつやつれてきた。社長と中西はそれをつきり彼にいい人が出来たのだと思った。

「取り越し苦労だったようだな」

「そのようですね」

二人は社長室で能天気になんな話をしていた。彼がある洋館に殆ど住み込んで美女と暮らしているということを既に知っていたのである。それでこうした話をしているのだった。

「相手はどうやら良家のお嬢様だそうです」

「それはなおい」

社長は中西の言葉を聞いて頬を緩ませる。まるで我が子の結婚のよう。

「言うことなしだ。そこまでとはな」

「どうやら地元の人だそうです」

「そうか。地元の」

社長にとってこれもいいことであつた。

「尚よしだ。それなら安心できる」

「全くだ。何でもですね」

ここで中西はさらに言うのであつた。

「いつも桜色の振袖に紅の袴のお嬢様だそうです」

「桜色に紅!？」

しかし。これを聞いた社長の顔が急に曇つた。

「いつもその服なのか」

「そうらしいです。見た人の話では」

「そうなのか」

何故か社長の顔が剣呑なものになっていく。そうして右手を自分の顎に当てて深く考えだしたのであつた。

「まさかとは思うが」

「どうかされたのですか、社長」

「まさかとは思うがな」

彼はそう前置きしたうえで中西に尋ねるのであった。

「そのお嬢様の名前はわかるかな」

「名前ですか」

「そうだ。聞いていないか」

何故か強い言葉で聞いてくるので中西の方も内心困惑した。だがそれでも社長の言葉なので頭の中で必死に探して思い出すのであった。

「確か。田村だったかと」

「田村か」

社長の顔色がいよいよ一変した。

「それで間違いないのだな」

「確か。しかしそれが何か」

「そんな筈はないのだが」

彼はまた言うのだった。深刻極まりない顔になっていた。

「何故ですか？」

「娘さんの下の名前も聞きたい」

今度はこう中西に問うた。

「念の為だ。それはわかるか」

「申し訳ありませんが今は」

中西は本当に申し訳なさそうな顔で社長に述べた。

「忘れてしまいました」

「そうか。いや」

だが社長は話をしているうちにふと考えをあらためて言うのだった。

「麗華と合わないか。その人は」

「ああ、確か」

中西はそれを聞いて思い出した顔になり自分で自分に納得しだした。社長はそれを見ていよいよ深刻さだけでなく剣呑さもその顔に

本格的なものにさせたのであった。

「そういう御名前でした」

「有り得ないな」

それが話を全て聞いた社長の言葉であった。

「それは絶対にな」

「？何故でしょうか」

中西は社長のその言葉を聞いて目をしばたかせた。

「有り得ないとは。またどうして」

「わしは田村家を知っている」

「おお、お知り合いでしたか」

中西はそれを聞いてすぐに能天気な顔になった。彼は何もわかっていないといった感じであった。

「それでしたらすぐにあちらにもお話を」

「それはできん」

だが社長はその言葉に首を横に振った。

「残念だがな」

「またそれはどうして」

「もうその家はないからだ」

彼は峻厳な声でそう告げた。顔も声と同じものになっていた。

第四章

「ないのだ」

「それはまたどうして」

「皆死んでいる」

それが彼の言葉であつた。

「既にな」

「またおかしなことを」

中西は最初は笑つてその言葉を否定した。

「現にそのお嬢様のところに彼が」

「だからだ。危ないのだ」

しかし社長は彼が笑っているのとは完全に正反対に深刻な顔を続けるのであつた。もうそこには恐ろしいものを見たものすらあつた。

「危ないとは」

「木村を呼べ」

彼はすぐに言つた。

「今会社の中にいるな。だったらすぐにだ」

「すぐにですか」

「そうだ。早く」

彼は中西を急かさせるようにして述べた。

「すぐに確かめたい。さもないと」

「さもないと」

「あいつの命に関わるかも知れないぞ」

社長はそこまで言うのだった。そうしてすぐに藤次郎を呼ばせた。社長室に入つて来た藤次郎は一月前と比べて驚く程やつれていた。

目にも生気が乏しくまるで別人のようであつた。社長はその彼を見て言うのだった。

「やはりな」

「木村君をお連れしました」

「何か御用でしょうか」

「木村」

社長は彼に声をかけた。先程中西に見せた声と顔で。

「心に決めた令嬢がいるそうだな」

「それは」

「隠さずともいい」

藤次郎が何か言おうとする前に告げた。やはり深刻な顔で。

「良家のお嬢様だそうだな」

「はい。洋館におられます」

彼はそう素直に社長に告げた。

「別におかしな方では」

「素性はな」

社長は彼の言葉にそう前置きをした。

「素性は確かだ。田村麗華さんだな」

「御存知でしたか」

「だから話は聞いている」

またそう告げるのだった。

「そして。おおよそのことは知っているつもりだ」

「そうだったのですか」

「その田村家についても麗華さんについてもな」

知っていると。そう藤次郎に告げるのであった。だがそれでも社長の顔がにこりともしないことに藤次郎は心の中で妙なものを感じていた。

「知っているのだ、わしは」

「では社長」

ここで彼は親にも等しい社長に彼女との交際を正式に認めてもらおうとした。それならばいいだろうと思ったからだ。社長が知っている人ならば。

「是非共」

「話は最後まで聞け」

社長は強い声で藤次郎に述べた。

「知っていると云っても色々あるな」

「ええ、まあ」

それはわかる。知っていてもいい関係とは限らないものである。

これは藤次郎の早合点であつた。しかも彼はかなり樂觀的に考えてしまつていた。

「いいか。その田村家はな」

「はい」

「かつてと言つても明治だが」

そう前置きして述べる。

「この横須賀でかなり知られた名家だつたのだ」

「そうだつたのですか」

「しかしな。代々短命の家系で」

不吉な前置きであつた。藤次郎もそれを聞いて不吉なものを感じた。

「誰もが若くして亡くなつた。労咳でな」

「労咳ですか」

「そうだ。それでな」

所謂結核のことである。この時代はそれが脚氣と並ぶ国民病であり多くの人間がこの病で命を落としている。この時代では宮沢賢治も結核で若くして亡くなつてゐる。

「死んでゐるのだ。皆な」

「皆と言いましても」

「御前の聞きたいことはわかつてゐる」

社長はまた藤次郎に述べた。

「娘さんのことだな」

「そうです。その人のことも御存知なのですな」

藤次郎は自分の声がつわずつてゐるのがわかつた。麗華への気持ちは抑えられなくなつてゐるのが今この状況でもわかつた。

「それでしたら」

「今あの娘さんが何処にいるのかも見当がついている」

社長はまた藤次郎に告げた。

「昼は会っていないのだったな」

「はい」

藤次郎は素直に答えた。これは事実である。会っているのは夜だけである。彼はそのことに何の疑念も抱いてはいなかった。何故なら彼は昼に働いているからである。そうして夜に会う。それで奇妙に思うというのも有り得ない話であった。

「そうか。では昼にも会ってみるといい」

社長はそこまで言うのと中西に顔を向けた。そうして言うのだった。暫く留守にする」

「わかりました。それでは」

「うむ、その間は頼む」

そこまで告げて彼は席を立ち帽子立てにかけてある自分の帽子を取ってから藤次郎に対して告げるのであった。重い声で。

「一緒に来るんだ。いいな」

「わかりました」

藤次郎はその言葉に頷いた。そうして社長について外に出るのだった。

第五章

社長は会社の車に彼を乗せた。そうして街から離れた静かな場所に彼を連れて行った。そこは墓地だった。藤次郎はその墓地を見て怪訝な顔で社長に尋ねた。

「あの」

車から降りる時に社長に問う。社長は車の後部座席で彼と並んで座っていた。

「ここは」

「降りればわかる」

社長は岩の様に険しい顔で彼に告げた。

「降りればな」

「はあ」

「わかつたらすぐに降りるんだ」

また彼に言う。

「いいな」

「わかりました。それじゃあ」

彼は社長の言葉に従うことにした。そうして降りる。降りて社長に連れられて墓地の中を進む。左右に青や黒の墓石が並んでいる。彼はそれを見ているうちに得体の知れない不吉なものに心を支配されていき不安に包まれていくのであった。

そうしてその不吉さと不安さが頂点に達した時。彼はある墓石の前にいた。社長はそこで足を止めており彼に顔を向けていたのであった。

「いいか」

「ここは」

「見ろ」

社長は墓石に顔を向けて藤次郎に告げた。

「この墓石を」

「墓石をですか」

「そうだ。わかるな」

見ればそれは田村家の墓石であつた。そうしてそこに書かれている名前には。

「えっ……」

「わかるな。わしの言いたいことが」

「あの、社長」

藤次郎は驚きを隠せずに社長に対して言つた。その顔は強張り今にも割れそうな程であつた。

「これは一体」

「見た通りだ。代々短命だと言つたな」

「はい」

それははつきりと聞いていた。だからこそ頷くしかなかった。

「そうですけれど」

「ならわかる筈だ。麗華さんもまた労咳で亡くなっているのだ」

「しかし」

「会つていると言いたいのだな」

また藤次郎に顔を向けて言つ。

「そう言つと思つていた」

「私は本当にあの方と」

「だからだ」

社長の声はさらに沈痛なものになつていた。だがそれ以上に恐ろしいものを見ている顔になつていた。それは藤次郎にもわかつた。

「麗華さんは間違いなくこの世の者ではない」

「この世の。それでは」

「死霊だ」

社長は真つ青な顔で述べた。

「間違いなく死霊だ。そして御前はその死霊に取り憑かれているのだ」

「死霊に」

「死霊に憑かれれば死ぬ」

昔からよく言われている言葉である。これは社長も知っていたし無論藤次郎も知っていた。それで二人は強張った顔をしているのであった。

「御前はこのままだと」

「しかし麗華さんは」

彼は強張った顔のままで社長に言った。声は震えていたがそれでも言うのだった。

「悪い人ではないと言いたいのだな」

「そうです」

彼が言いたいのはそれであつた。

「ですからそれは」

「それは彼女の考えとは別なものだ」

しかし社長はこう彼に告げるのであつた。無念さを出た声で。

「別なものですか」

「生ある者と死せる者とは住む世界が違う」

あまりにも厳しい言葉であつたがそれは紛れもない現実であつた。現実であるがそれでも藤次郎にとって受け入れられるものかどうかは別である。しかし社長はそれには気付かず話をしているのであつた。それがどうなるかは彼は知らなかつた。

「だからだ。わかるな」

「別れる、ですか」

「このままだと死ぬぞ」

社長は彼に言った。

「いや、連れて行かれる」

「あちらの世界にですか」

「そうだ。それでもいいのか」

あらためて彼に問うた。

「それでも。いいのか？」

「それは」

藤次郎は言葉を詰まらせ俯いてしまった。そう問われれば言うつし
かない言葉だけがあるのだった。

第六章

「そうだな。それは言わなくてもいい」

「ですか」

「そんなことを受け入れられる人間はいない」

社長は言う。少なくとも彼はそう考えていた。

「この世の人間ならばな」

「そうですね」

「それが摂理だ」

こうも言う。彼は間違いなくこの世の人間でありその考えであった。だからこそその言葉であるがここでは藤次郎の思いは聞いてはいなかった。聞くまでもないとも思っていたのだ。

「そういうことだ。わかったな」

「はあ」

藤次郎の返事は弱々しい。顔も俯いている。社長はそれを決断したからだと思った。しかしそうではなかった。それにも気付かなかったのだ。

「では帰ろう。帰ってから細かいことを決める」

「細かいことを」

「このままでは何にもならないからな」

そう告げるのであった。

「御前がああ屋敷に行かないだけでは何にもならないのだ」

「何にもですか」

「うむ。守りがないと何にもならない」

まるで海軍のような言葉であるがその言葉には説得力があった。

藤次郎もそれを感じているが心に留めるかどうかはまた別であった。

「だからだ。暫く付き合ってもらおうぞ」

「わかりました」

こうして彼は寺から多くの札をもらいそれを自分の部屋に貼るこ

とになった。彼は下宿に住んでいたのだ。その部屋は至る場所に札が貼られそれ以外の部分が見えない程であった。

「これで宜しいですな」

下宿の前で札を書いた社長と馴染みの住職が社長に問うてきた。そこには藤次郎もいる。

「ええ。有り難うございます」

社長はまんべんなく貼られた札を見ながら社長に答えた。

「これでこの男も助かります」

「しかし。まさかとは思いますが」

住職は困惑した顔で社長に述べるのであった。

「あのお嬢様が」

「やはり執着あつてのことなのでしょうか」

彼は深刻な顔でそう述べた。

「だからこそまだこの世に」

「そうでしょうな」

住職は社長のその言葉に頷いた。

「その執着が何かはわかりませんが」

「この男に対するものでしょうか」

社長は悄然とした顔で無言で立っている藤次郎を見て住職に言った。

「やはり」

「かも知れませんか」

住職もそれを聞いて言うのだった。

「だとしても。恐ろしい執念です」

「死してもなおですからな」

社長も言う。

「ですがその執念は」

「はい、人を殺めてしまいます」

住職は無念そうに述べた。

「悲しいものでしてな。死霊というものは自分の意志に関係なくこ

の世の者を連れて行ってしまうのです」

「自分がどう思っていてもですか」

「左様です。この世の者ではありませんので」

住職も社長と同じことを言うのだった。むしろ社長が住職の考えを聞いてそれを藤次郎に述べていたのだ。そう言つてよかった。

「どうしてもそうなるのです」

「ですな」

「しかしこれで安心できます」

住職はまずは満足した顔を見せた。

「これだけ貼れば。あのお嬢様も寄つては来れますまい」

「感謝致します」

社長は住職にあらためて礼を述べた。

「この男を失うわけにはいきませんからな」

「ふむ」

住職は社長の言葉を聞いて藤次郎を見た。見れば彼から見てもかなりの男前である。彼も素直にそれを認めて言うのであった。

「これでは。死霊に惚れられても仕方ありませんな」

「そう思われますか」

「顔がいいのは悪いことはありません」

俗世的な言葉であつた。

「しかし。それが常によいとは限らないのが世の中の難しいところ
でして」

「今回のようにですか」

「世の中はわからないものでありましてな」

住職はふと無常めいた言葉を出してきた。僧侶らしい言葉であり
実に似合っていた。

「何が完全によくて何が完全に悪いかはありませぬ。そして」

「そして？」

「よいものが悪いものにもなってしまうのです」

「左様ですか」

社長にもそれはわかった。彼は昔からこの住職と付き合いがあり
しかも仏教についても信仰が深い。だからこそわかることなのであ
った。

「この方にしろそうです」

「そうなりますか」

「ええ。あと気をつけるべきなのは」

住職は考えながら述べる。そうしてまた言うのだった。

「あの屋敷に近付かぬことです」

「あの屋敷にはですか」

「左様です。近付けばここに札を貼った意味もなくなります」

住職は社長の心に刻み込むようにして言う。これは本来は藤次郎
に対するものであるが彼には刻まれなかった。彼の心には届かなか
ったのだ。

第七章

「おわかりですな」

「はい」

社長が答えるのであった。

「わかりました。それでは」

「宜しいですな」

住職は藤次郎に顔を向けて問うた。

「それで」

「わかりました」

藤次郎は一応は答えた。だがその返答は虚ろなものであった。しかしそれもまた住職も社長も気付いてはいなかった。彼の本当の心に。

「左様ですか。それではこれで」

「ええ」

社長が応える。

「ではこれから」

「何でしょうか」

社長はその顔を急に笑わせてきた。住職もそれに応える。

「仕事も終わりましたし今日は」

「おお、そうですな」

住職も笑顔になっている。話がわかっていたのだ。

「はい、般若湯でも」

「いいですな」

般若湯とは酒のことである。僧侶は本来酒を飲めないのであるがこつ名前を変えて飲んでいるのである。何時でも相当厳格でない限り僧侶も酒を嗜んでいるものであるがそれにはこつした理由をつけているのである。方便であるがそれでも立派な理由になっている。「それではそれで」

「ええ。さあ貴方も」

住職は気を利かせて藤次郎にも声をかけてきた。

「是非共。さあ」

「遠慮はいらんど」

社長も笑顔で彼に声をかける。

「飲むのは多い方がいいからな」

「わかりました。それでは」

こうして三人はある料亭に向かった。そこは社長の行き着けの店であるがそれと共に海軍将校達がよく来る店でもあった。広く大きな店であり中に入るとやはり白い軍服の男達の姿があちこちで見られるのであった。

「今日も大勢おられますな」

「そうですな」

社長は笑顔で住職に応える。彼等も海軍とはそれなりの付き合いがあり知らぬ仲ではないのだ。だからこそこの店にしたという理由もあるのだ。

「なあ木村」

社長は店の女の一人に案内されて黒く長い木の廊下を進みながら藤次郎に声をかけてきた。その左右には襖が立ち並びそこからも賑やかな声が聞こえてくる。

「こうした店をはじめてだったか」

「いえ」

だが彼はその言葉には首を横に振るのであった。

「東京の大学にいた頃に。先輩に連れて行ってもらったことがあります」

「ほう、東京でか」

「そうです、赤坂の店に」

そう社長に告げた。

「一度だけですぐ連れて行ってもらいました」

「いい先輩だな」

社長はその話を聞いてこう彼に告げた。

「わざわざ後輩を連れて行くとはな」

「その時は何が何だかわかりませんでした」

「ははは、最初は何でもそうですぞ」

住職は藤次郎のその言葉に顔を崩して笑うのであった。

「拙僧も最初の法事の時は何をしていいのかわかりませんでした」

「そうだったんですか」

「そうしたものです。わからないものです」

そう彼に述べた。

「しかし何事も数を積みめば」

「ええ」

「変わってくるものなのです」

明るいが優しい声で彼に言う。その言葉はそのまま彼の心に入ってくるものであった。不思議な説得力のある言葉であった。

「だからです。こうした場合」

「何回か来るうちにですか」

「左様です」

「見ろ、木村」

社長はまた辺りを指差す。そこでは海軍の若い将校が芸者達を相手に賑やかに笑っていた。

「あの海軍さん達は御前と左程変わらない歳だな」

「はい」

見ればそうであった。彼によく似た感じの将校までいる。

「そういうことだ。彼等も最初は慣れてはいなかった」

「何回も来るうちにですか」

「仕事だってそうだろう？」

今度は何気なく仕事にも言及する。

「何度もやるうちにさまになってくるな」

「はい、それは」

仕事のことになったので真面目に答える。この真面目さが彼であ

った。

「まあ御前は最初から立派だったがな」

「いえ、私は」

「それだ」

ここで彼の真面目さに頼もしい笑みを見せるのであった。

「その真面目さがいいのだ。わかったか」

「そうだったんですか」

「そうだ。だがな」

そこまで話したうえでまた顔を真剣なものにさせる。

「真面目過ぎて。周りが見えないのもよくない」

「はあ」

「社長の仰る通りですな」

それに住職も笑顔で頷くのであった。

「時として破目を外さなければ駄目ですな」

「住職はまた外し過ぎでは？」

社長は今度は住職に突っ込みを入れた。

「遊びも大概にしないと毒ですぞ」

「ははは、毒も知らねばなりませんので」

住職もまた懲りない。相変わらずの様子である。

第八章

「そちらも御仏の道ですぞ」

「これは違うからな」

社長は藤次郎に対して述べる。

「よく覚えておけよ」

「そうなんですか」

「いやいや、社長もまたわかっておられぬのです」

しかし住職もまた言う。

「道はですな。毒も知らない」と

「住職のそれは極道になつてゐるではないですか」

「そつした道を知るのもまた」

かなり手前勝手な道の解釈をする住職であつた。しかしそれでも妙に説得力のある言葉であつた。藤次郎はそんな住職と社長の話を聞きながら奥座敷の部屋に入りそくで美酒と馳走を楽しむのであつた。だがその中でも今一つ浮かない顔であつた。

宴は程なく済んだ。社長も住職も泥酔寸前まで酔つておりその身体を芸者達に支えられていた。だが藤次郎はかなり飲んだのにまだ平氣であつた。

「お強いですな」

「若いからだな」

住職と社長はそんな彼を見て言うのだった。

「わしも若い頃はな。それこそ」

「拙僧もですぞ」

二人は真つ赤な顔でそう言う。

「浴びるように毎日飲んでも平氣だった」

「拙僧もそれこそ法事の後には信者の方々とですな」

「まあまあ御二人共」

彼等の肩を持つてゐる芸者の一人が笑いながら二人に言う。

「今も御立派ではありませんか」

「そうかな」

「だといいいのですね」

かなり見え見えのお世辞にも笑える程泥酔している二人であった。

「まあここは車でも呼んで」

「帰りますか」

「もう御呼びしていますよ」

芸者の一人がまた言う。

「ですからもう少しお待ち下さい」

「わかった」

「それでは」

芸者のその言葉に頷く。そうして入り口で泥酔したまま車を待つ。藤次郎もそこにいて車を待つのであった。

その横を海軍将校達が横切る。彼等の中には笑顔で社長と住職に敬礼をする者もいる。やはり互いに顔を知っているからこそであった。

「社長、どうも」

「住職さん、こんばんは」

「おう、どうも」

「こんばんは」

二人もまた挨拶を返す。そうしてすぐに酔い潰れてしまった。藤次郎はそんな二人の横に立っていたが少し年配の階級が上の将校が彼の前を通り掛かった。そうして彼の顔をちらりと見たところで怪訝な顔を浮かべるのであった。

「よくないな」

「何か」

「いや、失礼なことを言うがね」

その海軍将校はそのまま彼に言うのであった。

「君の顔には死相が出ている」

「死相がですか」

「そうだ。一旦は消えたが」

彼の顔を見続けながらの言葉であつた。

「消えたのですか」

「しかし。これは不思議なことだ」

将校はさらに述べる。見ればいぶかしむ表情もそこにある。

「また出て来ている。これは一体」

「そういうことはないのですか」

「普通はない」

それが彼の今までの見立てであるようである。それは藤次郎にも届いた。

「しかもだ」

「しかも」

「それを望んでさえいる」

「あの、それは」

「あくまで顔相での話だ」

こう断るが。それでも不吉な言葉だったのは間違いない。少なくとも藤次郎の心からは離れることがない言葉であつた。

「そうであるが。それにしても」

「私は。死にますか」

「では聞く。それが怖いかな？」

「怖いか、ですか」

「死ぬことがだ」

将校は藤次郎を見据えながら問う。それは彼に対して答えを強いるものであつた。

「それは。どうなのだ」

「はい。それは」

それを受けて答える。

「怖くはありません。むしろ」

「むしろ？」

「私は。悩んでいることがあります」

麗華のことである。例え彼女がこの世の者でないとしてもだ。それでも恋慕う気持ちがそこにある、それは間違いのないことなのだ。彼もそれは否定できなかった。

「それが果たせぬならばやはり」

「死んでもいいのか、それで」

「そうですね」

やはりその言葉に頷く。

「果たせぬのならば」

「思い詰めているな」

将校はそこまで聞いて述べた。

「何処までも」

「その通りです。ですがそれも」

考えが固まってきたのであった。だがもう一度将校に問うた。

「私は。その死を逃れることができますか」

「死をか」

「それは。どうなのでしょう」

「正直に言おう」

彼はそれを受けて述べた。本当に彼が見ているものをそのまま述べたのである。

「逃れれば逃れられる」

「そうですね」

「だが。その場合は望むものは得られない」

「決してですね」

「うむ」

藤次郎に対して頷いたのだった。

「決してな。それはわかっただろう」

「わかりました。ではやはり」

「死してもいいのなら手に入れるのだ」

こう彼に告げた。

第九章

「それでわかったな」

「わかりました」

「だが。死を恐れないとはな」

そのことについて思うところがあるのが藤次郎にもわかった。

「我々ならともかく」

「軍人なら、ですか」

「我々はまた特別だ」

将校は言う。軍人は命をかけて戦うものである。だからこそ死ぬのを恐れないというわけだ。そのことを藤次郎に告げたうえでまた言うのであった。

「その軍人から見ても。そこまで覚悟を決めているとはな」

「何分愚かな男ですので」

「それは誰も同じだ」

将校はそれを問題としなかった。

「だが。それでも望むとは。凄いものだ」

「はあ」

「それならば望む通りにすればいい」

こうまで述べた。

「それでな。これでいいか」

「わかりました。それでは」

彼はこれで完全に意を決した。そうして顔を晴れやかにさせた。

その日はそれで帰ったが次の日であった。彼は会社では静かに一日を過ごした。

「わかつていると思うがな」

社長はその彼に対して告げる。怪訝な顔で。

「帰ったならば」

「はい。家から出ずにですか」

「本来はこうして会社に来るのも止めるべきなのだ」

念には念を入れてである。だが彼が無理を言つて来たのである。それは何故か、彼だけが知っている事情からであつた。彼だけである。

「絶対にな」

「申し訳ありません」

「だが。来てしまったのなら仕方がない」

目をかけているうえに仕事ができるということもあり。だからこそ彼もそれを認めたのである。やはり彼を氣遣つた渋々にであるが。

「だが。明日からはな」

「はい。それでは」

「暫くの間だ」

こつちも告げた。

「その間だけ我慢すればいい。わかつたな」

「わかりました」

口ではこう述べる。しかしその意志は決まっていた。彼は会社に帰ればどうするかもう決めていた。そうしてそれを実行に移すのであつた。

会社から出ると社長から逃れるようにして去つた。そのまま向かう場所はもう決まっていた。あの洋館であつた。

洋館の前に来るといた。彼女が。

恨めしそうな、それでいて嬉しいような。そうした顔で藤次郎を見ていた。そうして彼に言うのであつた。女の、擦り切れるような切つない声で。

「何故今まで来て下さいませんでしたの？」

「迷っていました」

彼はじつと麗華を見詰めている。そのまま彼女に告げた。

「どうするべきか」

「では貴方はもう」

「はい、知りました」

彼はそのことをそのまま述べた。

「貴女のことを」

「そうですか」

麗華はそれを聞いて俯いた。その顔を諦めが支配していく。

「御知りになりましたのね、やはり」

「全て聞きました。何もかもを」

「そうですか。それでは」

彼女はそこまで聞いてその顔に完全に諦めのものを見せた。もうそれは変わらないかのようにであった。藤次郎にはそう見えるものであった。

第十章

「さようならですね」

寂しい声で言う。

「私と一緒にいることはもう」

「いえ」

だがここで。彼は言うのであった。

「私は別れるために来たのではないのです」

「えっ」

「その逆です。私は貴女と一緒にになる為に来たのです」

俯く麗華を見て言う。その言葉には何の偽りもなかった。

「私とですか」

「はい」

彼は澱みのない声で麗華に答えた。やはりその顔も何の澱みもなかった。

「その為に今」

「ですがそれは」

麗華はその言葉に顔を曇らせるのだった。それは彼を氣遣つてのことである。

「貴方はここにおられる方です。しかし私は」

「それでもです」

だが藤次郎の言葉は強い。そうして彼女に言うのであった。

「それに貴女も」

「私も？」

「それを望んでおられるのではないのですか？」

そう麗華に問うのであった。じつと彼女の目を見て。

「違いますか、それは」

「それは」

麗華はそれを否定しようとする。だがそれはできなかった。彼女の

も藤次郎を愛している。だからこそまだここに留まっているのだ。しかしそれは。彼女は辛い狭間の中にいたのである。そうしてその中で悩み苦しみ続けていたのである。

「そうですね。ですから」

「それはそうです」

苦渋に満ちた顔でそれを認めた。

「私も。できるなら貴方といたい。貴方を見ていたいです」

「それならば」

「そう思い貴方をお誘いしました」

自分でそれを言ったのだった。全て彼女が望んだことであつたのだ。

「それは事実です。ですが」

「迷つておられるのですか」

「貴方の御命を奪うことはできません」

麗華は藤次郎から顔を背けて告げた。それは本心からの言葉であつた。

「それが私の今の気持ちです。お慕いしてはいても」

「それが。本心なのです」

「はい」

顔を背けたままこくりと頷くのであつた。悲しい顔で。

「ですから。もう」

「御会いできないと」

「全ては私の愚かな迷い故でした」

そう考えることにしたのであつた。ここでは自分のことは自分の心の中に収めてである。そうして彼を氣遣う偽りの心を述べるのであつた。

「ですから。もう」

「それは貴女の本当の心ではありません」

それは藤次郎にもわかつていた。だからこそ彼女に対してそう言い返したのだった。

「そうですね」

「いえ」

それは否定する。

「違います」

「若しそうだとしても」

頑なになる麗華に対して勝負に出た。その言葉は。

「私は貴女と共にいたいのです」

「ですからそれは」

「何度も言います。私はその為にここに来ました」

そのことをまた麗華に告げるのだった。

「貴女と一緒にになる為に」

「それでどうなっても構わないというのですね」

「その通りです」

これもまたはつきりと彼女に対して言うのだった。

「貴女と共にいられるのでしたら。死んでもいいです」

「死んでも……」

「死を恐れる理由なぞ何処にもないのです」

それが藤次郎の言葉であった。

「一体何を恐れるのです？死なぞ」

「死ぬのが恐くないのですか」

「貴女と共にいられるのなら」

やはりこう述べるのだった。何処までも彼の決意は固かった。

「そんなものは。全く」

「左様ですか」

「はい。ですから」

じつと麗華を見て。もうその目を離すつもりはなかった。

「私は貴女と共にいたいのです」

「それで宜しいのですね？」

麗華はようやく顔を上げた。そうして恐る恐る藤次郎に問うのであった。

「藤次郎様は」

「貴女はどのようなのですか？」

藤次郎はその問いに答えずに逆に問い返した。その表情はもう動かなかった。

「貴女は」

「私は」

「私と共にいたいのですね」

「それは……」

言葉を偽ろうとする。そうして偽りの言葉を出そうとするがどうしてもそれは出なかった。そうしてそのかわりに出る言葉は一つであつた。

「その通りです」

正直な言葉が出るのだつた。それが出ることを止めることすらできなかつた。もう彼女も自分の心を。偽ることができなくなつていたのだ。

「私も。藤次郎様と」

「それでは。よいのですね」

「貴方さえよければ」

麗華は遂にその言葉を言った。もう自分を偽ることはできなかった。

「御願います」

「勿論です」

藤次郎の返事も既に決まっていた。そうして。

「一緒に。永遠に」

「はい。永遠に」

二人は手を取り合つた。そうしてそのまま洋館の中に消えていく。藤次郎が見つかったのは翌日であつた。心配して洋館に来た社長と住職が彼を見たのは二階のベッドの上であつた。そこで穏やかな顔をしてあの振袖と袴を抱いて眠っていたのであつた。

第十一章

「愚かな奴だ」

社長は藤次郎を見てこう言うしかなかった。彼は赤いベストとネクタイのまま眠っている。まるで天国に行くような顔をしてそこに眠っていたのだった。

「何故。このような」

「これが。この方の望みだったのかも知れません」

住職は辛い顔でそう社長に言うのだった。

「だからこそこうして」

「死を選んだのですか」

「今更ですが」

住職はもうそれまでの破戒僧の顔はなかった。酒を楽しまず仏門を語る顔になっていた。その顔で社長に対して言うのであった。

「人によつては死は救いであるのです」

「それは聞いています」

これは社長も知っていた。だが今はそれを否定しなかったのだ。

「しかし。それでも」

「この方を大事に思っていたのですね」

「素晴らしい男でした」

そう藤次郎を評して述べた。

「行く末が楽しみでしたが」

「しかし。それももう」

「はい。もう何もかもがこうなつては」

藤次郎はもういなくなつてしまったのだ。社長もそれを受け入れるしかなかった。彼はただ悲嘆にくれるしかなかった。それがどうしてもいたたまれなかったのである。

「これは。望んでのことだったのでしょうね」

「ですな」

住職は藤次郎のその穏やかな笑顔を見て述べた。そうとしか見えなかった。

「この方もそれを」

「生きていてもか」

「生ある世界だけではありませぬ故」

住職はまたしても仏教的な世界を述べるのだった。それはかつて札を貼って藤次郎を守ろうとした彼とはかなり違う顔であった。

「ですから」

「それにもっと早く気付くべきだったか」

社長は苦い顔でそう呟いた。

「わしが」

「いえ、それでも同じことでした」

住職を落ち込む彼に対してそう述べた。彼の心を慰める為であったがそれ以上の意味もそこにはあった。そうして彼に語るのである。

「この方はこうなる運命だったのですから」

「運命か」

「御覧下さい」

そうして藤次郎の顔を見るように告げる。麗華の服を抱いた彼は穏やかな顔のままであった。そこには何の憂いもなかった。生きている時よりも。

「この顔を。どう思われますか」

「いい顔ですな」

社長は答える。

「何の憂いもなく」

「今この方はそうした心でおられるのです」
社長に対して言う。

「想い人と共になれて」

「この世でなくともですな」

「幸福はこの世だけにあるものではありませんから」
それが彼の言いたいことであつた。

「それでそれを選んだと」

「それだけです。しかし」

住職は悟っているようであつたが。急に寂しい顔になった。自分でそれを消すこともできなかった。

「それでも。悲しいものは悲しいですな」

「はい。木村」

社長は彼の言葉を受けて。藤次郎に声をかけるのだった。

「あの世で。二人で楽しくやるのだぞ」

「社長の仰る通りです」

住職もまた彼に声をかけた。社長に続いて。

「どうか。楽しく」

藤次郎はそれには答えない。ただ笑っているだけであつた。もう白くなつてしまったその顔にはそれまでなかつたような笑みを浮かべているだけであつた。ただそれだけであつた。

大正牡丹燈籠

完

2007・10・28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3707d/>

大正牡丹灯籠

2010年10月8日15時04分発行